

名古屋市栄市税事務所長賞

未来は自分たちの手で

名古屋市立城山中学校 3年

高橋 百香

私は、祖母と同居している。私が小さな頃、マリンバを弾くのが大好きだった祖母は、様々な曲を演奏したり、一緒にマレットを持って弾き方を教えてくれたりした。しかし、祖母は年齢と共に聴力が低下し、楽器はおろか、日常の会話も難しくなってきた。耳鼻科の医師の勧めもあり、昨年混合性難聴の診断で身体障害者手帳を申請し、三級の認定を受けた。

この手帳によって、祖母は様々な税金の恩恵を受けられるようになった。一つ目は、高額な補聴器の購入に対する助成金を受けられた。祖母は自分に合った補聴器を購入することができ、再び私と日常の会話を楽しむことができ、笑顔が増えるようになった。税金が原資となり、祖母の生活が大きく改善された。

二つ目は、公共交通機関の利用料金が割引されるようになった。祖母は病院への通院のために頻繁に電車やバスを利用していたが、交通費の負担が大幅に軽減された。これもまた、税金のおかげであり、祖母にとって大きな助けとなっている。祖母から見せてもらった分厚い「障害者福祉のしおり」によると、他にも所得税や市民税・県民税が障害者控除により減免されたり、障害者医療費の助成が受けられたりした。私の住む名古屋市には、とても手厚い制度があることが分かった。

中学生の私は、消費税しか自分では税金を納めていない。その消費税すら、10%も払わなければいけないのは高いとさえ思っていた。

しかし、税金の仕組みがなかったら、どうなるだろうか。私が関わっていることだけでも、教科書の無償配布、子ども医療費制度による医療費無料、快適でいつでも好きな本を読むことができる公共図書館の運営と、これらが全て有料になる。一個人では、到底賄いきれないものだ。私は、税金がどれほど私たちの生活に密接に関わっているかを強く実感した。税金は義務として納めるものだが、その背後には、祖母のように支援を必要とする多くの人々の生活を支える大切な役割がある。納めた税金が、誰かの助けとなり、それが心のゆとりとなり、社会全体の幸せにつながっていくのだと思う。

私たちの未来は、「二〇二五年問題」が迫っており、超高齢化社会が訪れる。今以上に、医療・介護を含む社会保障費が膨らむことは明白だ。これに対し、労働人口が減っていくため、今の税金の仕組みでは成り立たなくなるだろう。新しい仕組み作りが喫緊の課題だ。

私が今できることは、税金の仕組みや使い道に関心を持ち、しっかりと学ぶことだと思う。今回いろいろ調べたことで、消費税10%が高いと思っていた自分が、恥ずかしく思えた。私は、少額の消費税でも、誰かの役に立っていることに誇りを持ちながら、今後は納めていきたい。そして、将来私が社会に出た時には、自分の意志で納税していきたい。祖母の笑顔を、誰もが幸せに暮らせる未来を、自分たちの手で守っていききたいから…。